

氏 名	そ だ りょう じ 祖 田 亮 次
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 171 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	サラワク・イバン人社会における人口流動と都市—農村関係の動態

論文調査委員 (主 査)  
教授 石原 潤 教授 金田 章裕 教授 石川 義孝

### 論 文 内 容 の 要 旨

アジアの都市—農村人口移動に関する研究は、移動の動機や背景を分析するものにはじまって、人口流出による農村社会へのインパクトを考察するものや、受入れ側としての都市における「過剰都市化」、「擬似都市化」の問題を取り上げる例が多数見られる。近年では、都市の急速な膨張や、農村における経済活動の多様化などの影響によって、「農村」や「農民」、「農家世帯」といった概念の再検討も進んでいる。これは、農村居住世帯にとっての都市流出者の重要性が増大したことと関係しており、従来のミクロな視点から、より広く社会を見据える眼が必要とされることを意味する。

移動者の立場に立てば、都市生活の経験は必然的に多民族社会における自己のアイデンティティを模索する作業を強いられる。たとえば、スクワッター集落を事例とする民族セグリゲーションのあり方や、都市就業に焦点を当てたインフォーマル・セクター論などは、地理学が積極的に研究を行ってきた領域である。一方、都市人類学の分野では、農村文化との接点を重視しつつ、都市における同郷組織の形成過程や「再部族化」現象等が議論の中心をなしてきた。

しかしながら、都市と農村をつなぐような形での研究は、依然として限られている。これは、まず、首位都市の極端な卓越性という現象面での特徴に呼応する形で、都市住民の研究が基本的に大都市に限られてきたということが挙げられよう。つまり、その規模や距離的問題から、農村出身の都市居住者について、彼らのバックグラウンドを詳細に検討することが困難となる。しかし、農村出身者にとっての都市の重要性とは、その人口規模や産業構造の面だけではなく、都市のあり方そのものであるという立場も見られる。つまり、マクロ社会と出身農村とを結びつけ得るさまざまな媒体の存在こそが重要である、という考え方である。その場合、都市と農村との間のフローは、双方向的なインタラクションとしてとらえることが不可欠とされる。ただし、注意すべき点は、インタラクトするのは都市と農村という地域でもなく、都市民と農村住民という地域的に類別された別個の集団どうしでもない。都市と農村の間を行き交うさまざまな人々が、それぞれの状況に応じて多様な関係を切り結び合う、その戦略と動態が考察対象とされるべきである。

このような立場に立つことで、大都市ではない地方中心地において、特定の社会集団を取り扱うことの意味も明らかにすることができる。たとえば、特定の民族集団を取り上げるとしても、そうした集団と他の集団、あるいはより上位の組織・社会とのインタラクションを詳細に見ていくことで、その関わり方に反映されるマクロ社会の動態というものが見えてくると考えられるからである。とくに、東南アジアのような多民族性が状態としてある地域においては、一般的な行動様式の存在を前提とするよりも、個々の民族や社会集団に個別の論理と行動様式があり、そこに反映される社会のあり方も異なると考えるのが自然である。

こうしたことを踏まえて、本研究の対象地域は、移動者の生活戦略を詳細に検討する場として、マレーシア・サラワク州の地方中心地とその後背地に設定された。それは、いわば「中規模社会」とでもいうべき領域であり、この地域で見られる先住民族イバン人の行動を詳細に検討することにより、農村と都市の間を流動する人々の戦略として、大都市ではなく、あえて出身農村の近隣地方都市において定着しようとする意図を、見てとることができるからである。本研究では、第2章か

ら第5章までを、現地調査に基づく実証研究に当てて、地方都市とその後背地を舞台とするイバン人のさまざまな行動戦略を、社会的・経済的・政治的観点から分析を進めている。

まず、第2章では、事例農村であるケミディング村での調査をもとに、農村からの人口流出とそれに関連する農業活動の変化、さらには農村社会構造の変化について考察する。その際、イバン人が持つ独自の居住形態や文化的背景を視野に入れ、近代化過程におけるそれらの社会的変化の意味を明確にしようとしている。具体的には、若い世代の離村傾向がより一層進展し、とくに農業や文化継承の面で重要な役割を担う既婚女性の長期的都市滞在が常態化している中で、イバン人の農村コミュニティの空洞化が進行しつつあることを指摘している。しかし、それでもなお、都市滞在になじめなかった者や、退職した高齢者層にとっては、いつでも帰れる場所として存在しており、離村したイバン人の積極的な都市生活を支えているのも事実である。

第3章では、イバン人社会における土地認識の変化について述べている。今世紀初頭から、慣習法に基づく土地利用を行いつつも、新しい商品作物としてゴムを導入したことによって、イバン人の農業活動は大きく変化した。具体的には、ゴム園の拡大によって焼畑陸稲栽培地が減少すると同時に、限定された範囲での水稲栽培が可能になり、土地利用区分が、ゴム園と水稲栽培地とに分化し、固定化された。このことがイバン人の土地占有の権利主張形態に変化をもたらし、近代的登記制度導入の基盤を築いた。本章は、人間の移動を中心的検討課題にしている他の章とは、若干色合いが異なる。しかし、農村資源をめぐる歴史的背景は、開発政策の推進に伴って農村住民と政府との間で展開されるさまざまなインタラクションや、都市と農村に分かれて住む世帯構成員どうしの資源管理をめぐる微妙な関係を把握するためにも、抑えておくべき重要な点である。そのことの意味は、とくに第5章において明らかにされる。

第4章では、前の2つの章とは視点を変えて、都市に移住したイバン人の生活戦略について考察している。主たる論点は、第1に、スクウォッター地区に居住していた都市貧困層が、都市行政とのインタラクションの結果、再定住集落における私的所有地を獲得した過程である。都市では、他の集団とのインタラクションの機会が増大するが、それは必ずしも敵対関係ばかりではない。調査地であるシブ町のスクウォッターでは、イバン人のほか、マレー人、ムラナウ人、華人がある程度のすみ分けをしつつ混住していたが、行政サイドとの交渉においては、これら複数の民族間の協調関係も見られた。第2の論点は、都市における永住基盤を確立した彼らと出身農村とのインタラクションである。つまり、都市と農村の両方において複数の居住地と財産を確保し、将来的な生活の安定をはかる都市住民の姿を描く中で、都市に居住するイバン人のライフサイクルを十分に意識した生活戦略を読み取ることができるのである。

第5章では、第4章に引き続き、都市住民と農村住民との関係を考察しているが、とくにサラワクにおける開発政策をめぐる動きや、イバン人による多民族的状況への対処の方法を検討することによって、よりマクロな政治情勢を視野に入れながら議論を進めることが可能となっている。つまり、イバン人はマレーシア、あるいはサラワクという国家的・地域的文脈において、構造的に背負わされている自らのマージナル性を十分に意識しながら、それでも現時点における最大の利益を引き出すために、戦略的な政治参加を行っているのである。この章においては、農村における世論形成に都市住民がいかに深くかかわっているかという点も明らかにしており、都市貧困層の政治的行動と都市―農村関係を結びつけて考察している。

これらの各章の検討において共通して認められたイバン人の行動の特徴とは、外部世界やマクロ社会との接触の中での、彼らの能動性である。ムスリムが優先されるマレーシアにおいて、彼らの行動は、必ずしも政治的抵抗という方向に向かうわけではないが、そうした状況を認識した上で、彼らは自らの生活基盤の安定をはかるさまざまな手段を講じている。そうした行動の基礎にあるのは、自らのライフサイクルをどのように見据えるかということであり、都市と出身農村の双方に居住基盤を築いたり、出自コミュニティや出自家族との紐帯維持を目的とした家族概念の拡大解釈を行ったりするのは、その表れである。また、生活基盤として経済的価値を高めつつある土地資源についても、その確保をめぐる家族内・コミュニティ内での微妙な関係を保つと同時に、政党や政治家とのインタラクションをも志向する。一方、農村コミュニティにとっても、こうしたことに習熟した人たちを、都市・農村の地域的な隔たりを越えて、オピニオン・リーダーとして必要としているのである。

以上、本研究では、都市―農村間移動という観点から議論をはじめたが、現在のイバン人の生活実態の究明を通じて、強調すべき点は必ずしも移動という現象そのものではなく、むしろ生活拠点・生活範囲の戦略的拡大という点にあることが明

らかにされた。それは、自己のライフサイクルを十分考慮した上での、新たな生活世界の形成と言い換えることもできる。イバン人の行動様式について、彼らを取り巻く社会的・経済的・政治的状況に即して総合的に検討してみた結果、彼らのライフサイクルの中に、すでに都市と農村が有機的に組み込まれており、彼ら自身も、都市・農村を統合化された一つの範疇として認識しているようだとの結論に達した。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、マレーシア・サラワク州におけるフィールドワークにもとづき、イバン人社会における人口流動と、その結果として生じた都市—農村関係の実態を究明し、第三世界の都市—農村関係論への新たな貢献を期したものである。研究史を展望し本論文の課題を導出した第1章と、4編の実証研究に相当する第2～5章、及び結論にあたる第6章から構成されている。

第1章では、まず第三世界、なかでも東南アジアの都市—農村研究に関する近年の内外の研究動向を広く展望し、近年の主要な論点を巧みに整理している。即ち、農村については、①農村住民の生計戦略の多様化を捉え、②「農民」「農家世帯」「農村」などの既成概念を再検討する動き、一方都市側については、③農村出身者が都市で生きていく上で重要な都市的要素を明らかにし、④移住者によって形成される都市貧困層の能動性を捉え、⑤都市移住者にとっての出身農村の意味を再検討する動きである。論者は、このような一連の研究動向を肯定的に評価しながらも、既往の諸研究中には、①農村と都市の両面からの調査に基づき、②都市—農村のインタラクションを、③移動する主体に即して論じた研究が、欠けているとする。論者は、このようなタイプの研究が、第三世界の地方都市と周辺農村を含む「中規模社会」において可能であり、かつ必要であるとの考えに基づき、マレーシア・サラワク州のラジャン川中下流域のイバン人を対象に、地方都市と農村の両方でのフィールドワークを実行した。

第2章は、農村側での事例調査の成果であり、イバン人のロングハウス・コミュニティの一つであるケミディング村において、インテシブな住み込み調査によってもたらされた。論者はまず、村の長老達へのインタビューに基づき、ロングハウスの歴史を復元するとともに、イバン人の移動や就労の実態の変化と、それに対応する諸概念の変化を明らかにした。またロングハウスを構成する各世帯（ビレック）についての、詳細な聞き取り調査により、各世帯の世帯員の構成、出稼ぎの状況、農業の現況と神聖米パディ・プンの継承状況を明らかにした。これらから論者は、当ロングハウスから都市への人口移動が、青年男子の単身出稼ぎから妻を伴った都市移住の段階に達しており、ビレックの神聖米継承の途絶、空き家の増大、人口の高齢化が進み、総じてロングハウス・コミュニティの空洞化が進んでいることを、説得的に論証した。なお本章の初出は、日本地理学会の機関誌『地理学評論』に掲載された論説であるが、当論文に対しては、その質の高さにより、1999年度研究奨励賞が授与されたことを付言しておきたい。

第3章は、同じくケミディング村とその周辺地域でのフィールドワークに基づき、イバン人の土地利用の変遷に伴う土地所有観念の変化を扱ったものである。論者は戦前から現在に至る大量の土地登記記録を分析すると共に、聞き取りや空中写真の分析により、その背後にある土地利用の変遷を明らかにした。これらを通じて、論者は、本来土地所有観念を持たない焼畑農耕民であったイバン人が、ゴム樹の栽培や水稻作の導入を契機に、次第に土地所有観念を形成してきた過程を見事に論証している。すなわち、土地へのアクセスが自由であった時期から、ロングハウス領域の固定期、個人占有地の固定期を経て、現在では土地所有観念形成期に達しているとする。その多くが未登記ではあるが、自らのものであると観念された土地を村に残していること、これが次章以下で論じられる、都市移住者の村への強い関心の一要因であると論者は考える。

第4章は、都市に移住したイバン族の実態を精力的な現地調査により明らかにしたもので、対象とした都市は、ラジャン川中下流域のイバン人の主要な移住先である地方都市シブである。論者は、この町のスクウォッター（不法占拠地区）から改良住宅地区に移り住んだイバン人集団へのアンケート調査と、行政当局者や住民各層への聞き取り調査により、①都市のイバン人がどのような生計戦略を取っているか、また②彼らが出身農村とどのような関係を維持しているかを検討した。その結果、都市に出たイバン人は、都市の貧困層を形成しながらも、必要に応じて他の民族集団とも協調して、自らの居住条件の改善を実現し、他方では、都市における老後の生活の不安定さへの予想から、度々の帰村行動などを通じて、出身村との強い紐帯を維持し続けているという、興味深い事実が明らかにされた。都市に移住した少数民族の生計戦略のしたたか

さと、農村との深い繋がりを、鮮明なかたちで実証した論攷として、高く評価できよう。

第5章は、都市と農村の繋がりをそのものを考察したもので、シブの町とケミディング村の双方での、イバン人住民及び政治的指導層の意識や行動に関する調査に基づいて論述されている。マレーシアでは、ブミプトラ（華人など外来者に対する原住民の総称）は、政治的に優遇されているが、イバン人など非ムスリムのブミプトラは、マレー人などムスリムブミプトラに対して、明瞭に劣位にある。そうした状況下で、都市へ移住したイバン人は、単に支配される側に止まっているのではなく、国家の開発戦略に対応しつつ、自らの利益（特に土地に対する権益）を維持すべく、多様な政治的行動を行っている。具体的には、投票登録地を自由に選択できるという現行制度を生かして、都市移住者は、時には野党の、時には与党の政治リーダーに与して、出身農村で政治行動を起こし、農村に止まっているイバン人達も、このような動きを基本的に歓迎している。論者は、この章において、都市移住者と出身農村との深い繋がりを、政治の面を通じて、具体的に論証したと言える。

以上のような検討を踏まえて、結章である第6章において、論者は、イバン人都市移住者は、自らのライフサイクルを見据えた戦略によって、出身村との密接な繋がりを維持し続けているのであり、そのような行動が可能な移住先として、遠方の大都市ではなく、頻繁な往復が可能な地方都市が選択される意味があると総括している。妥当な結論であると言えよう。

本論文の成果のひとつは、かつては「首狩り族」とされ、ロングハウスに住み、焼き畑耕作を行う「未開民族」とみなされていたイバン人の、現代社会における変容と「適応」の実態を、鮮明に描き出した点にある。論者は、本論文の準備のため、足かけ6年にわたり、7回の現地調査を行ったが、その果実が本論文では十二分に生がされている。本論文の成果の第2は、イバン人都市移住者と出身農村とのインタラクションを捉え、両者間の深い繋がりを実証したことにある。これは、都市と農村の双方で調査を行うという、論者の独特な方法によってはじめて可能になったことであり、大きな貢献であると言える。論者の言う「中規模社会」論の有効性も、少なくともイバン人については実証されたと言えよう。

なお、論者にとって今後に残された最大の課題は、イバン人社会において有効であった「強いインタラクション」論や「中規模社会」論が、それ以外の東南アジアや、広く第三世界の諸民族にも有効であるかどうかの、見通しをつけていく作業であろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2001年1月24日、調査委員3名が、論文内容とそれに関係した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。